

# 「子どもが安心して通える学校」 「信頼関係を大切にした学校」をつくっていこう

～名古屋市立中学生の「転落死」について（第2次声明）～

2014年1月15日

愛知県教職員労働組合協議会

名古屋市教職員労働組合

2013年7月10日名古屋市立中学校に通う中学生がマンションから転落して死亡しました。わたしたち愛教労・名教労は、「子どもと教職員の人権を守る」を運動のスローガンにしてきました。その人権の最大の柱である命が失われた、ということで痛恨の思いでこの事実を受け止めました。そして、7月23日には「第1次声明」を発表し、2度とこのようなことが起きないように呼びかけをしました。

わたしたちは、その後、独自に調査を行い、このことについて話し合ってきました。そして、その中で、こういった事態は、この中学校だけでなく、日本の他の多くの中学校でも起こりうる深刻な問題であると考えに至りました。

今回は、調査結果から分かったことも紹介しつつ、愛教労・名教労としての見解を「第2次声明」という形でまとめました。この声明を通して、「子どもが安心して通える学校づくり」「信頼関係を大切にした学校づくり」が日本の全ての中学校で進められ、教育関係者のみならず地域や保護者の方々の間でも、真摯な議論や行動が起きることを期待します。

## ☆ 今、中学校教育は…

### 信頼関係を大切にした学校を

中学校では、思春期ゆえに生徒指導が大変難しく、教師の指導もかなり困難になってきます。そして、いわゆる「荒れた」中学校の場合、当面の効果をねらって、規則を徹底するなど、きまりや外見を重視し、それを厳しく求める「つよい指導」が行われることがあります。

しかし、「つよい指導」自体が目的化したり、生徒の思いや生活状況を考慮することがなかつたりすると、深刻な問題につながることもあります。見た目には学校は平静を装っていても、実際には、教師と生徒、そして、生徒と生徒の間の信頼関係が失われ、生徒たちの中に、力による序列関係が生まれ、弱い立場の生徒は、常に不安感と孤立感を持ちながら学校生活を送らなければならないという事態も生じます。

今回の中学生はメモを残しました。そこには、「うそをたくさんついて提出物も出さない。そんな自分がいやになりました」「いろんな人から死ねと言われた」「気づいてあげられなかったなどと後悔しないで下さい」と書かれていました。提出物を出せないことで自分自身を否定し、深刻に悩んでいた状況がうかがわれます。また、「死ね」という冷たい言葉が日常的に交わされていたということから、生徒たちの人間関係のありようも気になります。

また、この問題は、この中学校だけのことではありません。他の中学校でも「おまえなんか死ね」とか「ああ、死んでやる」という言葉が交わされているという実態が見られます。「つよい指導」で悩み苦しんでいる生徒や保護者の

方もいます。

## ☆ 一人一人の子どもを大切にするために 教職員の勤務条件の改善と少人数学級の実現を

教職員の勤務実態について考えると、この学校では時間外勤務で月に100時間を超える教職員が、5月に17人、6月に16人もいました（調査対象は32人）。つまり教職員の半数以上において過労死ラインを大きく超える勤務の実態が見られたのです。また、部活動担当者は土日も出勤して部活指導をしているという実態もあります。

そして、この学校は、中学1年の時は愛知県独自の措置で少人数学級が実現しており、1学級30人の6学級でした。それが中学2年からは1学級減となり、1学級36人の5学級になりました。その結果、担任が担当する生徒数も増えました。中学2年でも少人数学級が継続していたら、もう少し生徒の様子を見ることができたのではないのでしょうか。

## ☆ 深刻な問題をこそ話し合う職員会議に 教職員のチームワークこそが最大の教育力

わたしたちの調査によると、これまでに、この問題で、学校の全職員による十分な議論がなされていないということがわかりました。

もしそうだとしたら、それは大きな問題ではないのでしょうか。生徒が転落死したことは、単に生徒個人の問題として、全職員で深く考え合う必要のないことにしているのでしょうか。わたしたちは、学校現場が今回の出来事を受けて、今後の学校教育をどうしていくのか、生徒の心のケアはどうするのか等、集中的な教育論議を行う必要があると考えます。

また、全職員で論議し、共通理解を得て、みんなで教育活動にあたる中で、教職員のチームワークが生まれます。それこそが学校の最大の教育力になるとわたしたちは考えます。

## ☆ 検証委員会の議論は、学校づくりに活かされるものに

名古屋市は、この問題で検証委員会を立ち上げました。検証委員会による当該教員への聞き取り調査も進められています。検証委員会は、生徒が亡くなった背景を調査すると思われませんが、それが「犯人探し」のような形で進められるべきでないといわたしたちは考えます。なぜなら、この学校に今も生徒たちが通い、教職員が働いているからです。

この学校の生徒たちが安心して学校に通えるような教育にしていくこと、そして、教職員が意欲を持って働くことができる職場にしていくことが今まさに求められています。検証委員会の活動もそこに焦点を当てる必要があると考えます。検証委員会での議論は、学校教育の現状や教職員の勤務実態など、多面的に調査・分析し、今後の学校づくりをともに考え合うというスタンスを大切にしてほしいものです。

わたしたち愛教労・名教労としても、中学校そして全ての学校で、子どもが安心して通える学校づくり、信頼関係を大切にした学校づくりが進められるよう今後とも取り組んでいきます。